

対話的な哲学実践を多様な仕方自慢する試み

—八つの自慢を提示する—

古賀裕也

【はじめに】

何を自慢すべきだろうか。

頭の中の記憶をたどりながらあれこれ考えているうちに、ふと自分がしていることに注意が向いた。自慢できる話を探すことはそっちのけで、「自慢とは何か」について考えていたのだ。

のだ、と書いてはみたがこれは別に驚くべきことではないということを主張したい。むしろごくごく当たり前のことである。

考えてみよう、もし妻の誕生日に「いい映画がみたい」と言われたなら、その時は「いい」の意味をいかに考えたかが試されているのである。何の吟味もなく、ただ有名俳優が出ているという理

由でこの映画は「いい」に違いないなどと言おうものなら、疑惑の目で見られながら確認されるだろう。「へー、それが『いい』と思ったんだね」と。

同様に、「自慢」について考えずに「自慢できる何か」を記憶の引き出しから引っ張ってくるほど危なっかしいものはない。誰かに怒られるに決まっている。

ただ、誰かに怒られるとしても、自慢したいことはある。まず何より自分が哲学対話をはじめとする哲学プラクティスに出会って、哲学も教育も両方共これまでより好きになった。ついでに、より多くの視点から理解することができるようになった。その喜びが

自慢の扉

また哲学プラクティスという形で哲学すること・教育することへと駆り立て、共鳴する実践仲間や参加者・生徒を生み出してきた。私個人の感想だが、それでもこれまで本を読んだり授業をしたりしても大して変わらなかった哲学への、教育への、人への関わり方が、哲学プラクティスによってガラッと変わってしまったのだからこれは相当すごいことだ。これは自慢していい。勉強もコミュニケーションも苦手な少年がロックに出会ってギターに目覚め、ひたすらギターに打ち込み、文化祭の出し物で晒し者になるはずが超絶ギターによってまさかの拍手喝采を浴びた日の帰り道に、「ロックってすげえんだぜ！」と自慢していいとしたら。そこまでドラマチックではないにしても私も多少の自慢は許されよう。

【学校での自慢】

①A0 入試の面接対策になった

実は高校生は質問されることが苦手だ。「応仁の乱が起きたのは何年ですか？」と、習ったこと確認されることには慣れているが、「なぜ本学を受験しようと思ったのですか？」と、習っていないことを質問されると頭が真っ白になる場合がある。大人の問いかけに対して、自分の声で応答するというのは、慣れていないと相当に難しい。

しかし哲学対話の場を一度でも経験しているだけで、ちがう。それは問いに対して二種類の反応を学ぶからだ。ひとつはクラス全体すなわち受験生全体の縮図がみな同じように発言が得意でないということ、これを知りだけで安心できる。もうひとつはそんな状況でも話せる人がいて、この人は嘲笑や叱責の対象どころか尊敬の対象となる。この人は未踏の地に踏み出した冒険家、沈黙と空白から救ってくれた救済者、無からの創造者だからだ。ただしこの人は神ではない。同じトラック

自慢の扉

を走ってきて、それぞれのゴールを目指している共走者だ。だから同じことをしてみようと挑戦できる。

哲学対話では、発言は誰にとっても難しいんだという安心が得られ、同時に誰もが自分なりの仕方です発言可能だと挑戦される。これはAO入試や就職面接だけでなく、ゼミやミーティングの際にも経験されるものであって、その練習「が」ではなく、その練習「も」自然にできてしまうというのは軽く自慢して良からう。

②高校で哲学対話に触れた生徒が哲学科に入ったという事例が出てきた。

これはいいか悪いかわからない。哲学を研究するということと実践するということはまだだいぶ距離がある。

③哲学っぽい話をする場所ができた。

これは生徒からよく出てくる

話なのだが、心に引っかかっている問いを何かしら友人と分かち合えないかと話してみると、「重い」とか「病みそう」とかあしらわれて取り合ってもらえないらしい。みんなと哲学すれば、「病んでいる」と思われていた人が実はまともで、まともだと思われていた人の中にも哲学の種があるのだということがわかる。その価値の逆転を行うのが、ファシリテーターなどと呼ばれる実践者だ。冒頭の例でいうと、この人こそロックスターだ。ふつうは言えないことを空気を読まずに言ってしまう。しかもかっこよく。おそろしくいままで「病んでいる」とさていれた誰かにとってのヒーローだ。だとしたらこれは自慢しなければいけない。

④哲学は易きに流れない

ロックスターで思い出したが、日本のロックスターであるROLLY(ローリー寺西)氏が母校から受けたインタビューを紹介し

自慢の扉

たい。

「ぼくは反抗期に反抗的な態度を取ることもある意味素直な行動だと思っていました。だからこそ反抗期にあえて反抗しないことこそ反抗であると考えていて…」(浪工会 HP、「活躍する卒業生」より)、だれもが発達段階において陥る反抗期というものに反抗し、一周してむしろ従順になる。しかし中身は自然本性に抗い、青年期というレッテルを超越し、表面的な反抗表現に無反省に追従した者たちからも距離をおきながら、自分なりの「反抗」を創造してゆく。これこそロックである。

いやこの本はロックの雑誌ではなかった。というか私自身ロックと言われてもあまりピンとこない。しかし基本的に哲学は rock(ロック)、つまり何かを揺り動かすことから始まる。しかしそれは「寝た子を起こす」というか、秩序を乱すようであり好ましくないことかもしれない。しかし規則でも知識でも何でも「そうい

うものだ」と処理して心が岩のように凝り固まってしまうこともまた恐ろしい。もしかしたら部活で先輩やコーチの言うことに盲従することが正しいことだと勘違いして悪質なプレーに走るかもしれない。あるいは、同性愛は一種のわがままで、不利益を被るのは当然だと思いこむかもしれない。

哲学の授業をうけ入れること、つまり揺さぶられる経験をうけ入れることは、これまでの学校のあり方を安易に・無反省に再生産しないためにも、生徒だけでなく先生にも必要である。哲学の実践がなければ、現在行われているかなり革新的な教育改革すら易きに流れて凝り固まってしまう可能性がある。

最後に自慢したいのは、まさにその教育改革を推し進める文部科学省の所轄である国立教育政策研究所で総括研究官をつとめる西野真由美氏が、哲学対話がこれから重要であると応援してく

自慢の扉

れていることだ。私自身、事務局として企画・実行した2017年の第三回哲学プラクティス連絡会での西野氏を報告者とするパネルディスカッションの舞台裏でそのような応援メッセージを頂き、自分の信じてやってきたことが報われたような気持ちになった。何より、P4Cを「哲学対話」として学校の授業に取り入れることに尽力(半分偶然だが)してきた土屋陽介氏が西野氏との「再会」を喜んでくれたのは微笑ましいエピソードである。土屋氏がP4Cと出会ったばかりのころ、最初にP4Cを日本に紹介している先駆者として西野氏の論文に出会っていたのであった。

【実践者の自慢】

いま土屋氏のことを取り上げましたが、私は幸いにも様々な実践を知る機会があったのでその実践に関わる自慢をしたい。

⑤みんな貪欲

周りの実践者はどんどんいろ

んなことを始めていった。中・高、大学、小学校、未就学児と保護者、企業…さまざまなコミュニティに入っていく、失敗と成功を重ねながら態度や手法を洗練させていった。

コミュニティごとに言うと、やはり中・高は実践の数も多く、様々な実践が行われてきている。中にはもはやオーソドックスな「哲学対話」の原型をとどめていないような実践もある。だがそれは、他ならぬその学校で必要な仕方なのだ。初期の段階で試された「根っこワーク」は自分でも分からない欲求を明らかにしつつ問いを洗練化したし、「サイレントダイアログ」は発言ではなく書くことで力を発揮する生徒を取り込めたし、二重の円をつくる「金魚鉢対話」は対話のメタ認知を促した。あるいは授業とかけ合わせたり、テストや提出物での論述も試されたり、評価基準の作成や評価行為を生徒と共に行ったりもした。国語でも「絵本対話」

自慢の扉

や「短歌穴埋めワーク」などがあり、英語での対話も試みられた。みんな貪欲である。

私も勤めた学校によっては哲学対話を多目にやっていたしその中でやり方を様々に試みた、あるいは一度も「対話の授業」を作らなかった学校もある。たしかに作らなかったが、授業外で会話は一番多かったかもしれない。そのような会話の中に、私が哲学対話の経験から得た何かが宿っていたのではないか、そうだったらいいなと思う。他にも図書館、部活、サークル、ゼミへと対話の場が広がった例もあった。

⑥慎重だけど広がった

いまは学校に限定して書いたが、様々な場で活動した結果、本当に色々な方々の参加が増えて実践者と参加者相互のコラボレーションも生じ、カフェ以外でも思いもしなかったようなところから声がかかるようになっていく。例えば、(哲学以外の)学会、

美術館、病院、介護施設、ギャラリー、寺社、公民館、町会・自治会…。ああ、そんなところにも哲学の種が眠っていたのか、あなたもそうだったのか、と思う。

一方、慎重すぎたのかもしれないとも思う。思うがやはりそれすらも自慢したい。みんな哲学の種を持っているんだ、でも何というか機が熟して自ずと哲学せずにはいられなくなるその時が来るまで哲学することを押し付けたくないんだ、その抑制ができたことを静かに自慢したい。

あとは色々な団体が立ち上がり、本がつくられ、信念をもった独自の活動が増えている。個人的には哲学対話の紹介動画に出させてもらって、YouTubeにも(勝手に)出た。ただ、NHK「Q」に関わった人たちの前では霞んでしまう。着ぐるみでもいいからいつか出たい。

⑦哲学の可能性を改めて知った最初にも少し触れたが、哲学って

自慢の扉

やっぱいいなと思った。大学の勉強は、領域が高度に専門化しており、専門という謎の門の中にはお互い入れなかった。哲学もそのくらいがあったが、哲学は専門の

「門」をチェックするそこそこ嫌な奴である。たとえば数学の門に対して、そもそも数とは何か？数は存在すると言えるか？その場合の「存在」とは何か？そうしたことを尋ねて困らせると同時に数というものへの態度を自問させて先鋭化させる謎掛け人である。ところが哲学は哲学自身に対してそれを怠っていたような気もする。

哲学すること自身を振り返りながら哲学しようとする時、それが大学で言われる哲学とはちょっと違っていたとしても自分の視野は広がったのは間違いない。これは教育についても同じである。対話すること、哲学自身が何者かあやふやであること、それらを経験することは哲学誕生の原点を経験することである。謎掛け

人たる哲学の原風景を経験することは他の様々な領域にも改めて息を吹き込むことになる。これは素晴らしいことだ。

【生活の自慢】

⑧その人らしさへの影響

最後に、私は常に主張してきた。哲学的な対話に携わる人間は生活の中でも傾聴や寛容や真理への愛などの「徳」というか性格化された良さを持つに違いないと。最初、私にはそれらの良さが(もしかしたら)欠けていたかもしれないが、対話によって充実してきたことを実感する。私は元から謙虚な人間だが、胸にあるものを言わないで済ますことが無くなってきたし、相手を理解しようとするしつこさも出てきた。だから生徒にも同僚にも妻にも、より対話的となった。その結果、自らの結婚式で新郎新婦共に自らファシリテーションをすることが自明なほどになってしまった。これもまた私たちの大切な自慢である。